

患者さんご本人との
コミュニケーションを第一に、
“伝わる診療”を心がけていきたい。



伝わってこそ、本当の医療。

当院では、主に診察室でcomuoonを活用しています。ご高齢の患者さんの場合、ご家族と一緒に診察を受けられるケースが多いのですが、病状のご説明や今後の治療法などをお伝えする際、まずはご家族の方に普通にお話をして、後からもう一度患者さんご本人に同じ内容を大きな声でお伝えし直すというスタイルになります。しかし、comuoonを導入してからは、ご家族にも患者さんご本人にも同時に聴いていただけるので、コミュニケーションが非常にスムーズになりました。それは効率という面だけでなく、患者さんの気持ちという面から考えても、とても良いことだと感じております。また、comuoonは丸みのあるやさしいデザインですので、診察室に置いても違和感がありませんし、患者

さんも抵抗感がないようです。今後、高齢化が進んでいく日本において、患者さん全体の年齢層が高齢者中心になっていくことは避けられないでしょう。そういう流れの中で、医療現場で起こっているエラーの主な原因であるミスコミュニケーションを減らしていくという意味でも、comuoonのような対話支援機器は、ますます重宝されていくのではないでしょうか。



清末 有宏 院長

東京駅センタービルクリニック 院長。東大病院循環器内科でスタッフドクターを務める傍ら、2009年に本クリニックを設立。両方の現場でcomuoonを活用している。

※取材内容は2015年3月時点のものです。

comuoonのおかげで、
患者さんと向き合うことの大
切さを改めて実感しました。



一步踏み込んだ診療が可能に。

聴こえにくい方を診療する際、これまで相手の目を見て、大きな声でゆっくりと話すよう心がけていました。しかし、それでも全ての情報を的確にお伝えするのは難しいのが現実。「補聴器を使ってもらえば?」と思われる方もいらっしゃるかと思いますが、普段補聴器をお持ちの患者さんでも、ハウリングによる雑音やセッティングの煩わしさを理由に、装用せずに来院されるケースが多いです。そういった方々に、納得のいく診療ができていなかったことは、医師としてとても残念なことでした。comuoonを使い始めてからは、話している内容が伝わりやすくなつたことで、患者さんも自然と顔を上げて聴いてくださるようになりましたし、互いの距離が縮まったという実感があります。これまで自分の中で「全て伝わるわけ

ではないし、相手にとって聴こえにくい話を長時間されるのはつらいかもしれない」という思いがあり、自ら説明を省いてしまうこともあります。しかし、comuoonのおかげでお話を理解していただきやすくなり、改めて患者さんと向き合うことの大切さを強く実感しています。そして、これをきっかけに、今までよりも一步踏み込んだ診療ができるようになったと手応えを感じています。



上杉 恵介 院長

上杉耳鼻咽喉科医院 院長。日本耳鼻咽喉科学会 専門医。「思いやりのある医療」をめざし、患者さんが納得いくまで病状をわかりやすく伝えることを日々心がけている。

※取材内容は2015年5月時点のものです。

受付でも、診察室でも、
聴こえのハンディキャップに
ていねいに応えたい。



やさしい環境への第一歩として。

患者さんが来院されて、最初に聴こえの問題が発生するのは受付業務です。ここでコミュニケーションがうまくいかない印象を与えてしまうと、その患者さんにとって敷居の高い場所になってしまいます。それにお金のやりとりや薬の説明、検査に関する注意事項など、大切な話をする機会が多いのも受付です。そのため当クリニックでは、受付にcomuoonを設置し、聴こえにくい患者さんを診療するときには、comuoonを診察室へと移動させて使っています。導入後は実際に、「言っていることがすごくわかりやすくなった」というお声もいただいております。実は、聴こえにくいという症状を自己認識していない方というのは意外に多く、comuoonを使ってみることで「こんなにも聴こえるんだ」と気づ

きを与えることもできると思います。聴こえの問題を抱えている患者さんはもちろん、それを自己認識していない方にとっても、comuoonは重要なツールになるのではないかと感じています。聴こえは生活全てに関わる分野ですから、耳の遠い方たちにとってのやさしい環境は、社会全体で築いていく必要があります。その第一歩として「まずは自分たちから」、そう思っています。



野村 敦宣 院長

医療法人社団 仁照会 のむらクリニックスクエア 院長。院内をバリアフリー構造にするなど、思いやりのある医療を実践。

※取材内容は2015年5月時点のものです。

歩道の点字ブロックのように、
comuoonがひとつのインフラに
なることを期待しています。



可能性を秘めた聴こえの支援。

当院ではcomuoonを4台導入しており、使用する際は私なりの工夫をしています。通常、comuoonのマイクは卓上に置いて使いますが、私は逆さまにしてデスクの裏面に固定することで、目立たなくしています。もともと存在感を感じさせないデザインのcomuoonですが、こうした工夫によってさらに自然な環境をつくることが可能です。comuoon導入を機に、以前よりも幅広く耳の遠い方へのサポートができるようになったと感じています。例えば、聴力が正常値より低いものの、難聴というほど耳が聴こえにくいわけではない方には、これまで特に有効な対策がなく、ただ励ますことしかできませんでした。しかしいまは「こういう製品もあります」とcomuoonを紹介できるようになりました。これは治療

行為ではありませんが、医療器具以外でも解決方法があるという選択肢が増えたことになります。患者さんにとっても、ただ励まされるより役立つことだと感じています。comuoonは可能性を秘めた製品ですので、今後の広がりに大いに期待しています。将来的には歩道の点字ブロックやAED(自動体外式除細動器)のような、ひとつのインフラになってほしいです。



松本 希 先生

九州大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉科学教室 助教・医学博士。業界内でもcomuoonをいち早く取り入れ、日々多くの聴こえの診療と向き合っている。

※取材内容は2015年9月時点のものです。